

シグナルは伝える

nacika

コミュニケーション能力

一昔前、よくコミュニケーション能力といった言葉が広まり始めました。コミュニケーション能力は人と話す能力のことで、日常的な会話や行動など人間本来の人と関わりを持つための能力です。コミュニケーション能力を育てるためにはまず他人と積極的に会話をとる必要があると言われていますが、私はそうは思いませんでした。コミュニケーション能力がないのに人と話すことはまず無理だからだと思うからです。人はもともと生まれながらにして人に関わろうとする能力があり、普通に育っていれば何もコミュニケーション能力が欠けることはないからです。

しかし、それでもコミュニケーション能力が欠けている人が増えていることは事実です。欠けてしまう原因は人それぞれですが、この本では学習障害とコミュニケーション能力を関連して取り上げていこうと思います。

学習障害

学習障害とは、先天性の障害で特に学習に対して覚えられない、人の話を理解することができないなどといった障害のこと言います。実は、私もこの学習障害で、小学校の頃はよく問題児扱いされました。問題行動が目立ち、本当に手のかかる子供でした。

私の場合における障害は、授業中に先生の言っていることが全く理解できていなかったことです。先生が何か言葉を言っていて、それが日本語であり言葉であることは理解できるのに、その言葉と言葉の組み合わせの意味、文としての意味が全く理解できていませんでした。それで当時の私は先生や人から何かを教えてもらうということがとても嫌いでした。

ほかにも、ルールが理解できないといった症状もありました。小学校の頃はじゃんけんのルール、けんけんぱのルール、けいどろといったような子供の遊びのルールがわからず、よくルールを破ったりオリジナルのルールを作ったり、勝手にこういうルールだ！と決めつけて変えようとしなないといったこともありました。

学習障害自体、このように様々な症状が見られますが、まとめると「聞く」、「話す」、「読む」という動作に支障をきたしています。ただ、書くことだけに関して言えば問題はありませんでした。

シグナルの存在

当時私が中学校三年生の頃。精神もようやく安定してきて小学校の頃と比べては問題児扱いもほとんどなくなり偏見の目で見られることも少なくなってきました。しかし、学習機能自体はやはりまだ依然として鈍く、それがそのまま学校での成績に反映されていました。自分の成績はもはやひどいものでした。また、話すことが苦手だったので、友達の数はい少ない方でした。

正直、このままだと俺はどうなっていくだろうと、真剣に悩んだ時期でもありました。まわりみんなと同じ普通の人間なのに他の人と同じようにできないこと。人には能力の限界があって個人差があって、きっと俺の限界はここなんだろうとも思っていました。

そんな時、私はよく考え込むようになりました。

授業中、休み時間、帰宅後、空いた時間を使ってペンと紙を手になにかをひたすら書いていく。今自分が何を考えているのかを事細かに箇条書きにして書き出し、そこで私はあることに気づきました。

それが「意思」の存在です。人は何かを認識するとき、例えば目で何かを見たり、耳で聞いたり、肌で感じたりするときにその認識した対象がどんなものなのかを感じ取る能力があります。それを私は「意思」なのではないかと考えました。

これはつまり、人は目で地面に落ちている「石」を見たりすると、ごつごつしていて灰色でいかにも固そうなイメージを感じ取ることができます。そのイメージとして感じ取ったものこそが意思なのではないかと思うのです。

この「意思」について、私は「シグナル」と呼ぶことにしました。それから身の回りにあるもの全てに対して、ひとつひとつ目でよく観察してみたり触ってみたりしてみました。その中で、「何かに形が似ている」と感じたり、「この色はあれと同じ色だ」と思ったりするようにもなりました。そして、私はまたひとつ何かに気づきました。

それは、物には必ず「名前」がついているということです。当たり前すぎることはありませんが、身の回りに名前のないものなどほとんどありません、別に名前なんてつける必要のないようなものまで名前がついています。携帯、ストラップ、スプーン、カップ、カメラ... ほんとにたくさんの物にたくさんの名前がついています。

そこで私は考え、ひとつの答えにたどり着いたのです。「人はシグナルに名前をつけることによって初めて記憶を行う」ということです。人はなにかを想像することができます、頭で構想を膨らまし、それを形にする能力のことです。ある人はそれで誰も見たことがない幻想的な絵を描き、ある人は斬新なデザインの家を建てることもあります。

でもやっぱり、そんな自分が想像した構想も、そのままにすれば必ず自分の頭の中から消えて

なくなってしまう物。だからこそすぐ形にする必要があったりなにかに書き残す必要があったりします。その課程で気づかずうちにその構想に名前をつけているのです。

つまり、構想に名前をつけるということは、もともと形を成していなかった物が物になるわけですから、そこにももちろんシグナルが作られます。要するに、想像するということはシグナルを作ることと同義であることがわかります。

このようにシグナルは人間の意思そのものであり、想像によって作られることもあるし、五感を通して外部から受け取られる情報でもあるのです。シグナルがどういったものなのかお分かりいただけただけでしょうか。

異なる種類のシグナル

第一章では、シグナルがどんなものなのを簡単に説明しましたが、第二章ではそのシグナルを細かく種類分けしていこうと思います。シグナルには大きく分けて、内心（インシグナル）と外心（アウトシグナル）があります。実は、他にもいくつか違う種類のシグナルである核心（コアシグナル）仮面心（ペルソナシグナル）などありますが、これについてはまた別な章で説明します。

内心と外心については、基本的に人と人との関わりで使うシグナルで、会話の上で「自分から相手へ」「相手から自分へ」と言ったように互いに一方通行のシグナルでもあります。

内心

内心は結構単純なもので、心の中の意思のことです。人間心の中では、人に知られることなく好き放題にいろんなことを考えることができます。今日の晩ご飯のことを考えてみたり、明日の休日の過ごし方を考えてみたり、絵の構想を練ってみたりそういった「考える」動作をひっくるめて内心と呼びます。

人は何かを考えて、答えを導くときになにかビビビッと電気が走るような感覚が起きます。そんなとき人はよく「ひらめいた！」や「思いついた！」などと言ったりしますね。このときに、脳内では内心でシグナルが生成された瞬間でもあります。

つまり、内心はシグナルを作るための源と考えてもいいと思います。大雑把に言ってしまうと、内心は脳内シグナル開発マシンなのです。

また、その特性から内心は誰からも知られることがないシグナルでもあると言えます、紙に書いたりと何かに形に残さない限りは絶対に人に知られることはありません。

内心の存在を認識することで、その存在を高めていくことで人は様々な社会からの洗脳に脱し、アイデンティティの確立とはよく言ったように、自己性（自分の存在の認識）が高まっていきます。

外心

外心は、内心と比べるとちょっとややこしいです。第一章で五感で感じ取るシグナルと言いましたが、それがこの外心にあたります。外心はアンテナのような受信機の役割を果たしており、目で見たり、耳で聞いたり、触ったりしたときに無意識のうちにそれが何か、それがどんなシグナルなのかを感じ取ることができます。逆に外心能力が鈍ると、五感があっても、それが何なのかを意味として理解ができなくなってしまいます。

無意識とは言いましたが、シグナルを得ているのですから頭の中に得たシグナルが一時的に記憶されているはずですから、その存在には気づくはずですが。ここでいう無意識というのは、わざわざ自分でシグナルを作る必要がないくらい本当に自然に意味として理解してしまうことを指します。よく、漢字などよく意味を間違えて覚えてしまっていたりすることがよくありますが、こういうのも漢字を目で見てなんとなくそれっぽい他の意味のシグナルと照らし合わせ脳が勝手に意味を判断してしまっているからです。俗に言う勘違い。

また、外心のおもしろいところは、外心で得たシグナルを内心で自由に加工することができるからです。たまに、イラストを描いている人の中では「擬人化」といった種類の絵を描く人がいます。これは、物を目でみて外心から受け取ったシグナルを内心で加工し、その加工の過程の中で「人」というシグナルを混ぜて物なのに人、人なのに物みたいな絵を描いてしまうのです。これは絵を描く能力が優れているのもありますが、シグナルを混ぜて互いのシグナルの両方を感じ取れるように描いたことが非常にすごいと思います。第三者がその擬人化した物の絵を見ても、物+人であることに気づくはずですが。そのこと自体シグナルを加工したということになるのです。

内心と外心のバランス

内心と外心にはそれぞれ強弱があり、バランスがあります。

内心能力に非常に優れ、外心能力には非常に劣ってしまっている場合、個性が強く、自分勝手に友達が少ない人格になり、逆に外心能力が非常に優れているのに内心能力が劣っていると、人の話していることをよく理解できて、友達が多いが、すぐに友達に影響されて自分の性格をころころと変えてしまうような人格になります。

この強弱とバランスは非常に大事で、コントロールはなかなか難しいことではありますが、内心と外心の存在を認識し常を感じ取っておくことでじょじょにコントロールできるようになってきます。

また、私のような学習障害の場合、この内心と外心に当てはめてみると、内心能力にはとくに問題はないのですが、外心能力が恐ろしいまでに劣っていました。先生の話を理解できないというのも先生が一生懸命内心で作りに出したシグナルも外心能力が劣っているため受け取ることができず、読むことができないというのも言葉や文章から発生するシグナルを外心が受け取ってくれないことを意味しています。

私がこの発見をしたのは高校に入ってからで、そして高校二年になったころ自分の学習障害の根本的な原因を突き止めました。

私の学習障害は、特に外心についての機能が非常に劣っているため起きた物です。特に何をしているわけでもないのに外心のみ能力が劣っており、当時の私はいろんな方法を試しこの障害の改善に取り組んできました。

第一章で言ったように物をよく観察してシグナルを感じ取り、物に名前つけてみたり、他にも日記を書いたり紙にずらずらと自分の考えを書き出してみたり、マインドマップにも手を出したこともありました。それでも結果は駄目で、少し改善したなと感じたことと言えばやはりこの内心と外心の存在に気づいたことだけでした。

それでも、私は考えました。勉強しても頭に入らないこんな体で、すでに高校も三年生に進級できないのではないかとと思われるほどに緊迫していました。

そして時はたち、いよいよ自分の進級が不可能だということがわかり高校を中退せざる終えなくなってしまう頃。私は精神的にも疲れ切った体であるキーワードでインターネットで検索を欠けてみました。

「左利き 学習」

私はもともと左利きで、小さい頃に右手に矯正しました。小さい頃親に左手でペンや箸を持つとすると手をたたかれた記憶があります。それまでずっと私は右手を使い続け、左手を使うときなんてはさみとボールを投げたりするくらいでした。それがもしかしたら原因なんじゃないかと考えネットで検索を欠けてみたのです。

そしたら、出てくる出てくる……。言語障害のことや、ディスレクシア、さらにはどもり、チック症なども。あの石原慎太郎都知事ももともと左利きで右手に矯正したが、なにか支障を感じたようで左利きに戻したという事実までも。

そこで私は、それを知ったその日から、以前買っておいてほとんど手をつけなかったボールペン字練習本をひっぱりだし左手で書く練習をはじめました。

予想通り、震える手、ほんとに慣れることがあるのかとおもいくらい雑な字ができました。お手本からははみ出し、もう字としての形も成り立ってはいませんでした。おまけにお手本が左手で隠れてしまっていました。もちろん、箸も左手です。

しばらくたち、完全左手生活を初めてから半年、あまり改善したような感じはしませんでした。それでも一生懸命左手だけを使い続けるようにし、無意識に箸を持ったらそれが左手だったというところまでいくようになりました。ボールペン字練習本を最後までやり遂げ何年かたった今。私は気づきました。

・・・シグナルが感じ取れることに・・・。

今まで目で何かを見ても、うんともすんとも感じる事ができなかったのに今では目で物を見たり触ってみたり誰かと会話したり、人の目を見ただけでもシグナルを感じる事が出来、それがなんなのか、どんなものなのか細かく感じ取れるようになっていました。ただ、話すことに関してはまだまだのようで、未だにどもりは完全に直ってはいません。

結局のところ、私の外心能力が劣っていた原因は左利きから右利きに矯正したことによりおきたものだったようです。これには、左利きの方は言語中枢が右脳にある場合が多いということが原因だと考えられているようです。本来人間は言語中枢は左脳にありますが、右脳に言語中枢があった場合右手を使うと、左脳優位型になるため言語中枢にアクセスしづらくなるのが原因なのではないかと思いました。